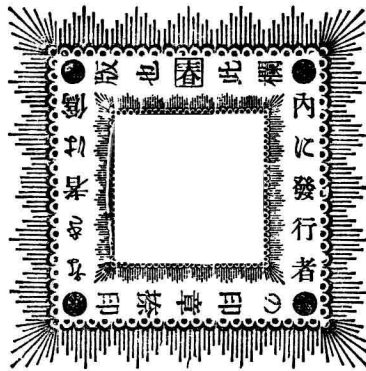


金色夜叉

中
編

明治三十一年十二月廿九日印刷
同 三十二年一月一日發行

版權所有



著者 紅葉山人

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田篤太郎

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者 星野諤次郎

東京市日本橋區通四丁目角

發行所 春陽堂

電話本局五拾壹番

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社

金色夜叉

實價金四拾錢

金色夜叉

紅 葉

第一章

未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて、眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶つたるに、例ならず繁き車輪の輾は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜むが如く、其の哀切に小き腸は斷れぬべし。

元日快晴、二日快晴、三日快晴と誌されたる日記を讀して、此黄昏より用は戦出でぬ。今は「風吹くな、なあ吹くな」と優

しき聲の宥むる者無きより、憤をも増したるやうに飾竹を吹靡けつく、乾ひたる葉を粗なげに鳴して、吼はては走りき、狂ひては引返し、揉みに揉んで獨り散々に騒げり。微曇りし空は之が爲に眠を覺されたる氣色にて、銀梨子地の如く無數の星を顯して、鋭く洩れたる光は寒氣を發つかと想はしむるまでに、其の薄明に曝さるゝ夜の街は殆ど氷らんとすなり。

人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、争か那の世間あり、社會あり、都あり、町あることを想得べき。九重の天、八際の地始めて渾沌の境を出でたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試に吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何

等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に遡く横はれるに
過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、酔ひ、戯
れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人々よ、彼等は儚くも夏果てし子
子の形を歛めて、今將何處に如何にして在るかを疑はざ
らんとするも難からずや。

多時靜なりし後、遙に拍子木の音は聞ゆ。其響の消ゆる
頃忽ち一點の燈火は見ゆ。初めしが、搖々と町の盡頭を横
截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を擅まに吹く
のみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎ、廂間の
下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞立て、心
地惡き微温の四方に溢るゝと與に、垢息き惡氣の盛に迸

るに遭へる綱引の車あり。勢ひて角より曲り來にければ、
避くべき違無くて其中を駈拔けたり。

「うむ、臭い。」

車の上に聲して行過ぎし跡には、葉卷の吸殻の捨てたる
が赤く見えて煙れり。

「もう湯は抜けるのかな。」

「へい、松の内は早仕舞でございます。」

車夫の恠く答へし後は語絶て、車は驀直に走れり。紳士
は二重外套の袖を袴と搔合せて、獺の衿皮の内に耳より
深く面を埋めたり。灰色の毛皮の敷物の端を車の後に垂
れて、横縞の華麗なる浮波織の蔽膝して、提灯の徽章は「

の花文字を二個組合せたるなり。行き／＼て車は此小路の盡頭を北に折れ、稍廣き街に出でしを、僅に走りて又西に入り、其の南側の半程に箕輪と記したる軒燈を掲げて、剡竹を飾れる門構の内に挽入れたり。玄關の障子に燈影の映しながら、格子は鎖固めたるを、車夫は打叩きて、「頼む、頼む。」

奥の方なる響動の劇しきに紛れて、取合はんともせざりければ、二人の車夫は聲を合せて訪ひつゝ、格子戸を連打にすれば、旋て急足の音立てゝ人は出で來ぬ。

圓鬚に結ひたる四十約の小さく瘦せて色白き女の、茶微塵の絲織の小袖に黒の奉書紬の紋付の羽織着たるは、此家

の内儀ないぎなるべし。彼の忙せはしげは格子かうしを啓あるを待ちて、紳士しんしは優然いうぜんと内に入らんとせしが、土間どまの一面に充満みちみたる履物ぶつの杖つゑを立つべき地さへあらざるに遅ためらへるを、彼は虚すかさず勤篤まめやかに下立ちたて、此の敬うやまふべき賓まろうびの爲ために辛からくも一條いちでうの道みちを開ひらけり。恚いかて紳士しんしの脱捨だつしてし駒下駄こまげのみは獨り障子しやうじの内に取入れられたり。

箕輪の奥は十疊の客間と八疊の中の間とを打抜きて、廣間の十個所に眞鍮の燭臺を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃れたるに、間毎の天井に白銅鍍の空氣ランプを點したれば、四邊は眞晝より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に餘んぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛りと歌留多遊を爲るなりけり。蠟燭の燄と炭火の熱と多人數の熱蒸と混じたる一種の溫氣は殆ど凝りて動かざる一間の内を、貰の煙と燈火の油煙とは互に纏れて渦卷きつゝ立迷へり。込合へる人々の面は皆赤うなりて、白粉の薄剥けたるあり、髪の解れたるあり、衣の亂次く

着頼れたるあり。女は粧ひ飾りたれば、取亂したるが特に著るく見ゆるなり。男はシャツの腋の裂けたるも知らで胴衣ばかりになれるあり、羽織を脱ぎて帶の解けたる尻を突出すもあり、十の指をば四まで紙にて結ひたるもあり。然しも息苦しき温氣も、咽ばさるゝ煙の渦も、皆狂して知らざる如く、寧ろ喜びて罵り喚く聲、笑頼るゝ聲、振合ひ、蹈破く薙き、一齊に揚ぐる響動など、絶間無き騒動の中に狼藉として戯れ遊ぶ爲體は、三綱五常も糸瓜の皮と地に塗れて、唯是修羅道を打覆したるばかりなり。

海上風波の難に遭へる時、若干の油を取りて航路に澆けば、浪は奇くも忽ち鎮りて、船は九死を出づべしとよ。今此

の如何とも爲べからざる亂脈の座中をば、其油の勢力をもて支配せる女王あり。猛びに猛ぶ男たちの心も其人の前には和ぎて、終に崇拜せざるはあらず。女たちは皆猜みつくも畏を懷けり。中の間なる團欒の柱側に座を占めて、重げに戴ける夜會結に淡紫のリボン飾して、小豆鼠の縮緬の羽織を着たるが、人の打騒ぐを興あるやうに涼き目を睜りて、躬は淑かに引繕へる娘あり。粧飾より相貌まで水際立ちて、凡ならず媚を含めるは、色を賣るものと假の姿したるにはあらずやと、始めて彼を見るものは皆疑へり。一番の勝負の果てぬ間に、宮といふ名は普く知られぬ。娘も數多居たり。醜きは、子守の借着したるか、茶番の姫君

の戸惑^{とまど}せるかと覺^{たほ}しきもあれど、中には二十人並^{なみ}、五十人並^{なみ}優^{すぐ}れたるもありき。服裝^{みなり}は宮より數等立派^{すどうりつぱ}なるは數多^{あまた}あり。彼は其點^{ちひ}にては中の位^{くらゐ}に過ぎず。貴族院議員^{きぞくゐんぎん}の愛娘^{まなむすめ}とて、最も不器量^{ふきりやう}を極めて遺憾^{いんかん}なしと見^みえたるが、最も綺羅^{きら}を飾^{かざ}りて、其起肩^{おのいかりかた}に紋御召^{もんためし}の三枚襲^{さんまい}を被^{かつ}ぎて、帶^{たび}は紫根^{しこん}の七絲^{しちん}に百合^{ゆり}の折枝^{せし}を縫^{ぬい}金の盛上^{もりあげ}にしたる、人々^{ひと}之が爲^{ため}に目も眩^{くら}れ、心も消^きへて眉^{まゆ}を皺^{しわ}めぬ。此外種々色々^{さまぐいろく}の絢爛^{きんらん}なる中に立交^{たふ}らひては、宮^{みや}の装^{よう装}は纔^{わづか}に曉^{あかつき}の星^{ほし}の光^{ひかり}を保^{たも}つに過^すぎざれども、彼の色^{いろ}の白^{しろ}さは如何^{いか}なる美^{うつく}しき染色^{さうしき}をも奪^はひて、彼の整^{ととの}へる面^{おもて}は如何^{いか}なる麗^{うる}はしき織物^{おりもの}よりも文章^{ぶんや}ありて、醜^{みにく}き人^{ひと}たちは如何^{いか}に着飾^{きかざ}らんとも其^{その}醜^{みにく}き

を蔽ふ能はざるが如く、彼は如何に飾らざるも其の美しきを害せざるなり。

袋棚と障子との片隅に手爐を圍みて、蜜柑を剥きつゝ語ふ男の一個は、彼の横顔を恍惚と遙に見入りたりしが、遂に思堪へざらんやうに呻き出せり。

「好い、好い、全く好い！馬士にも衣裳と謂ふけれど、美しいのは衣裳には及ばんね。物其自らが美しいのだから、着物などは如何でも可い、實は何も着て居らんでも可い。」

「裸體なら猶結構だ！」

此の強き合槌撃つは美術學校の學生なり。

綱曳にて駈着けし紳士は姑く休息の後内儀に導かれて入

來りつ。其後には、今まで居間に潜みたりし主の箕輪亮輔
 も附添ひたり。席上は入亂れて、爰を先途と激しき勝負の
 最中なれば、彼等の來れるに心着きしは稀なりけれど、片隅
 に物語れる二人は逸早く目を側めて紳士の風采を視たり。
 廣間の燈影は入口に立てる三人の姿を鮮かに照せり。色
 白の小さき内儀の口は疳の爲に引歪みて、其夫の額際より
 赭禿げたる頭顱は滑かに光れり。妻は尋常より小きに、夫
 は勝れたる大兵肥満にて、彼の常に心遣ありげの面色な
 るに引替へて、生きながら布袋を見る如き福相したり。
 紳士は年齒二十六七なるべく、長高く、好き程に肥にて、色
 は玉のやうなるに頬の邊には薄紅を帯びて、額厚く、口大

きく、腮あきどは左右はだこに蔓はびこりて、面積めんせきの廣ひろき顔かほは稍やう正せい方ほう形けいを成なせり。緩ゆるく波打なみてる髪かみを左ひだりの小鬢こびんより一文字なでつに撫付なでけて、少すこしは油あぶらを塗ぬりたり。濃こからぬ口髭くちひげを生はして、小こからぬ鼻はなに金縁きんよちの目鏡めがねを挟はさみ、五紋いつもんの黒鹽瀨くろしほせの羽織くわだちに華紋織くわもんたりの小袖こそでを裾長すうながに着做きなしたるが、六寸ろくすんの七絲帶しちんずびに金鏈子きんくさりを垂たれつゝ、大様たはやうに面おもてを舉あげて座中ざちゆうを眊みまはしたる容かたちは、實じつに光ひかりを發はなつらんやうに四邊あたひを拂はらひて見みえぬ。此團欒このぼんの中に彼の如ごとく色白いろしろく、身奇麗みぎれいに、而しかも美う々うしく装ようばひたるはあらざるなり。

「何だ、彼あれは？」

例れいの二人ふたりの一個ひとりは然さも憎にくさげに眩くらけり。

「可厭いやな奴やつ！」

唾吐くやうに言ひて學生は故と面を背けつ。

「お俊や、一寸。」と内儀は群集の中より其娘を手招きぬ。

お俊は兩親の紳士を伴へるを見るより、慌忙しく起ちて來れるが、顔好くはあらねど愛嬌深く、いと善く父に肖たり。高島田に結ひて、肉色縮緬の羽織に撮みたるほどの肩揚げしたり。顔を赧めつゝ紳士の前に跪きて、慇懃に頭を低れば、彼は纔に小腰を屈めしのみ。

「どうぞ此方へ。」

娘は案内せんと待構へけれど、紳士は然して好まじからぬやうに頷けり。母は歪める口を怪しげに動して、

「あの、見事な、まあ、御年玉を御戴きたよ。」